

# 社会に関心を向け、課題を追究する児童の育成

—小学5年社会科「日本の産業」における「理想の街づくり」を通して—

常滑市立青海中学校 教諭 澤 慎二郎

## <研究の概要>

本実践は小学5年生社会科「日本の産業」の単元において、地域教材を取り扱い、児童のつぶやきや気付きから学習課題や問いをつくることを通して、子ども自らが「納得解」や「最適解」を求める授業を目指した。特に、複数の産業を一つの街に集合させる「理想の街づくり」の学習を核として、子どもたちに社会事象を多面的・多角的に捉えさせる。

## <検索用キーワード>

社会に関心を向け 課題を追究する児童の育成

小学5年社会科 「日本の産業」 「理想の街づくり」

## 1 主題設定の理由

進展し続ける現代社会を生きる今の子どもたちには、どのような力が必要か。少子高齢化や若者の投票率の低下、自然災害など、現代社会には、さまざまな問題が山積みになっている。先行き不透明なこの世の中で、決まり切った答えのない社会を生きる子どもたちには、よりよい社会を築こう、よりよい市民になろうと社会に積極的に参画し続ける大人になってほしいと願う。今では情報化社会の発展に伴い、自身の考えをいつでも SNS 等により社会に発信できるようになった。そのため、小学校段階から社会事象に触れ、自分の考えに根拠や責任をもってほしいとも願う。

社会事象に直接触れられる教科として社会科の学習が考えられる。しかし、社会科を苦手とする児童からは、「社会科は覚えることばかりで嫌い」という言葉が聞かれ、社会科を暗記科目と捉えていることが伺える。これは、知識の獲得に重点を置いてきた我々教師の日々の授業が原因であると考えられる。一問一答の知識重視の授業ではなく、子ども自らが「なるほどそういうことだったのか」という「納得解」や「これが最もふさわしい」という「最適解」を求める授業への改善が必要と考える。

そこで、令和3年度の小学5年生社会科「日本の産業」の学習において、学習課題を「これからの日本の産業はどのように変わっていくのだろうか」と設定し、児童のもつ既存の知識や概念に対して、教師が揺さぶりをかけ続けることで、社会事象と向かい合わせ児童の思考を深められる授業づくりに挑戦した。しかし、日本の産業の課題を表面的に捉えることはできたものの、自分事として捉えられる児童は少なかった。これは、単元を通して教師から提示された学習課題や教師からの揺さぶりをこなすだけの学習となってしまったからだと考える。また、農業・水産業・工業の課題を単元ごとに別々に学習させたため、日本の産業全体の課題や未来の在り方を、一体的に根拠をもって捉えさせることはできなかったからでもある。

この反省を踏まえ、令和4年度の小学5年生社会科「日本の産業」の単元において、再度、授業改善を重ねることにした。今回は、身近な地域の産業を教材として取り扱うこと、また児童のつぶやきや気付きから学習課題や問いをつくることを通して、社会事象を自分事と捉えさせることとした。また、複数の産業を一つの街に集合させる「理想の街づくり」の学習を核として、自身の考えを問い直す場を設けたり、根拠をもって考えさせたりすることで、子どもたちに社会事象を多面的・多角的に捉えさせることを計画した。

以上より、小学5年生社会科「日本の産業」における、「理想の街づくり」の実践を核として、本研究のテーマを「社会に関心を向け、課題を追究する児童の育成」とし、研究を進めることにした。

## 2 目指す児童像

以下のように、目指す児童像を設定した。

- (1) 社会事象を自分事と捉えることのできる児童
- (2) 社会事象を多面的・多角的に捉え、根拠を基に考えをもつことのできる児童

## 3 研究の仮説

目指す児童像を受けて、以下のとおり仮説を立てた。

### (1) 仮説 1

日本の産業の課題に通底する自分たちに身近な産業を教材として取り上げれば、社会に関心を向けられるだろう。

### (2) 仮説 2

農業・水産業・工業の課題を一体的に取り上げるとともに、自身の考えを問い直す場を意図的に設ければ、課題を追究する力が高まるだろう。

#### 4 研究の方法

##### (1) 研究の手だて

###### ①仮説1に対する手だて

手だて㊦ 子どもの気付きやつぶやきを基に、単元を貫く学習課題をつくらせたり、問いに繋げさせたりする。

手だて㊧ 地域の産業に関わる課題を教材として提供し、それをきっかけに日本の産業について考えさせる。

###### ②仮説2に対する手だて

手だて㊨ 学習課題に対する自身の考えを、根拠をもって定期的に振り返ったり、調べたことをまとめたり、友達と話し合ったりしたことを基に自身の考えを問い直す場を設定する。

手だて㊩ 社会的な見方・考え方として、位置や空間的な広がり、時期や時間の経過、事象や人々の相互関係に着目させたり、揺さぶりをかけたりする。

##### (2) 抽出児について

抽出児については、本実践を通して目指す児童像に近づけたい児童を3人抽出した。以下は、事前アンケートや日頃の様子から抽出児の特徴をまとめたものである。<sup>1)</sup>

|    | 社会事象に対する意欲的な姿      | 追究する力             |
|----|--------------------|-------------------|
| A児 | △社会課題を自分事として捉えていない | ○根拠をもってまとめることができる |
| B児 | △社会事象に疑問をもつことができない | △多面的・多角的な視点が少ない   |
| C児 | ○社会事象に疑問をもつことができる  | △自身の考えだけでまとめてしまう  |

<sup>1)</sup>「抽出児まとめ」

#### 5 実践の実際

##### (1) 単元を貫く学習課題の設定

児童はこれまでの農業・水産業の各単元において、漁師から網掛け漁の方法を教えてもらったり、農家の指導の下、米を収穫したりするなど、体験的な活動等を通して、それぞれの産業に対する関心を高めていった。また、その後の工業の学習を経て、日本は世界に誇る工業大国であるが、近年では海外企業の進出などにより、低迷していることを知った。ここでA児から、「これから日本はどの産業に力を入れていくのだろうか」という疑問が投げかけられた。このA児のつぶやきは、農業・水産業・工業を一体的に捉える契機になると捉えて、本単元を貫く学習課題を「これからの日本の産業はどのように変わっていくのだろうか」とし、追究することにした。(手だて㊦)

##### (2) 立場を明確にして、これまでの学びをまとめる

第1時では、A児のつぶやきから「今後、発展していく産業はどこか」をテーマに自分の立場を明確にさせながら、発展すると予想する産業の①課題点、②課題に対する改善策の2点について根拠をもってワークシートにまとめさせた。ここでは、これまでの各産業に関する学習内容を根拠とするように伝えた。(手だて㊨)。続く第2時では、第一次産業である農業・水産業と第二次産業である工業に分かれて討論を行った。A児、B児は工業、C児は農業の立場をとった。討論では「工業廃水に対する問題」や「農業の人手不足の問題」に注目が集まった。今後発展する産業は「工業」であるという意見が多かったが、教師が「日本の工業は、原材料の高騰など多くの課題があるけど、本当にこのままで発展するのかな」と揺さぶると(手だて㊩)、C児が「四日市ぜんそくのような公害問題みたいに、工場がたくさんあると環境にも悪いから工業は発展しない方がよい」と歴史的背景を基に訴えた。それに対してB児は、「でも工業は日本の主力産業だよ。資源の少ない日本が発展するには自動車産業のようなものづくりをする産業に力を入れなくちゃだめだよ」と返す等、多様な意見が交わされた。児童はこの実践を経て、他者の考えに触れ自分の考えを問

い直す機会になった。B児は討論後も変わらず工業が今後発展していくと考えていたが、振り返りで農業の大切さも感じるようになった旨、記述をしていた。

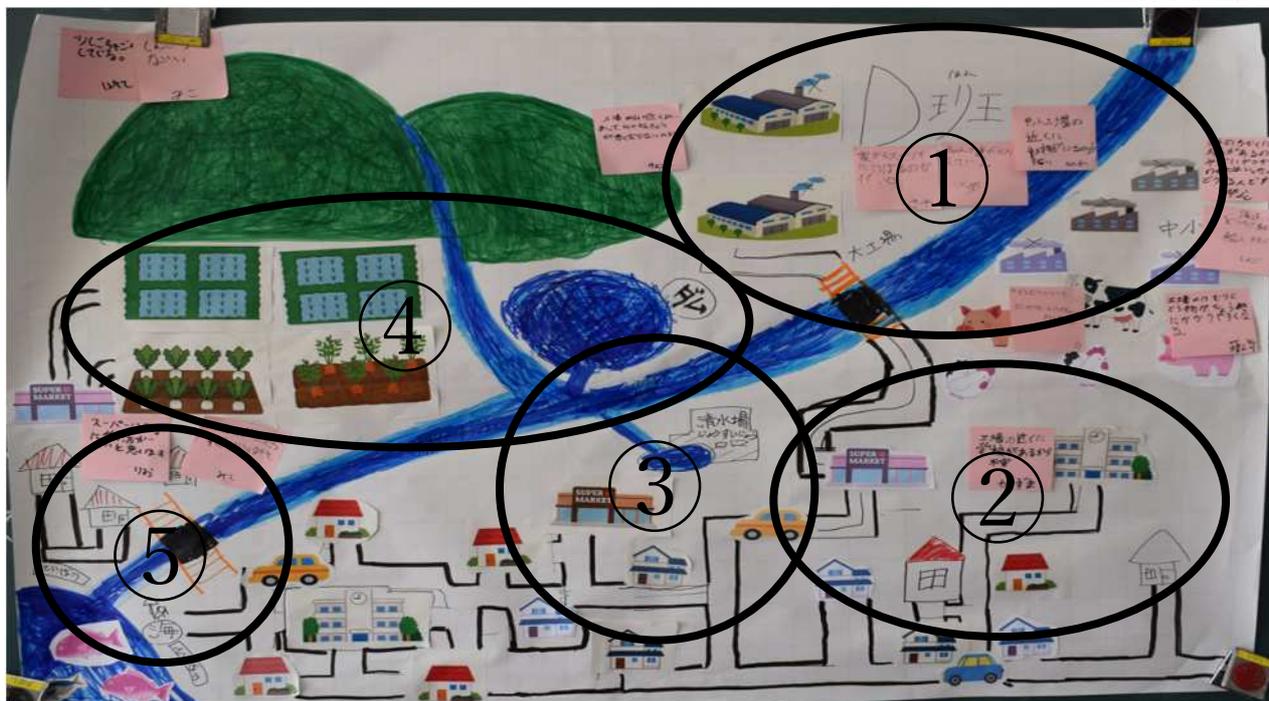
しかし、どの児童も各産業単体で課題解決をしていこうと考えていて、産業同士の関わりの視点が欠けていた。そこで、次時は社会的な見方・考え方である「空間」や「相互関係」の視点も取り入れながら、産業同士の関わりを一体的に捉えさせることとした。

### (3) 「空間」「相互関係」に着目させた「理想の街づくり」の実践

第3～4時では、各班に川と山と自宅を配置した模造紙1枚を与え、理想の街をつくらせる学習活動を行った。自宅を配置することで、街づくりをより一層自分事として捉えさせる工夫をした。模造紙には各産業に関わるイラストカードを貼付して理想の街を作らせることとした。これは産業同士の関わりについて一体的に考えさせることをねらいとしている。各班は川を起点に街づくりを始めた。産業に関係するイラストカードとして、これまで学習してきた農業・水産業・工業に関わる「畑」や「魚」、「工場」の他に、畜産業に関わるイラストや、「学校」や「八百屋」など生活する上で最低限必要となるイラストも用意した。その他、必要なものがあれば自由に描いてよいことにした。各班においては、次のような工夫<sup>2)</sup>が話し合われ、理想の街<sup>3)</sup>ができあがっていった。(手だて④)

- ①：運搬する手間を考慮して大工場の近くに中小工場を建てる。
- ②：生活のしやすさを考慮して住宅地の近くに学校やスーパーを建てる。
- ③：生活用水が使えるように住宅地の近くに浄水場を設置する。
- ④：水不足対策として畑の近くに川を引いてダムをつくる。
- ⑤：水難事故防止のため海岸に堤防をつくる。

2)「D班の工夫」



3)「D班が作成した理想の街」

第5時は各班が描いた理想の街について発表を行った。E班は前時の討論で取り上げられた工業廃水の問題や農作物への影響を踏まえ、工場地帯を川の下流に配置する工夫を発表した。発表を終え、各班がつくった理想の街の川を一本につなぎ合わせ、教師が「本当に何も問題はない理想の街になったかな」(手だて④)と問うと、B児が「私たちの街の工場廃水が隣の街の川に流れている」と発言した。教師の揺さぶりにより、B児は隣の街まで視野を広げ、新たな気づきを生むことができた。

こうして、社会的な見方・考え方としての「空間」「相互作用」の視点を意識させたことで、今まで学んできた農業・水産業・工業の課題は、互いに関わっていることに気付くなど、多角的・多面的に課題を見出し、追究することができた。

さらに、できあがった他の班の理想の街に対して、見つけた課題を付箋に書き込み、貼付させる活動を行った（手だて④）。児童はこの活動を行ったことで、資源不足によるエネルギー問題や自然災害の問題など、新たな課題を客観的に見出すことができた。

#### (4) 「時間」「相互関係」に着目させた地域における産業発展

第6～7時では、各産業の「相互関係」や「時間」の視点をもたせ、産業発展について考えさせることとした。ここでは、学習課題が自分事となるように、地元の産業を教材として扱うこととした。（手だて④）

まず、第6時では「1980年代の西知多産業道路の写真」<sup>4)</sup>を児童に提示し、道路ができたことでどの産業が発展するか考えさせた。すると児童は、道路ができたことで、資源の運搬がしやすくなり工業が発展したことに着目した。さらにA児の「道路の前は何があったのか」というつぶやきに対して、教師は「1950年代の知多市の海岸の写真」<sup>5)</sup>を続けて提示し、2枚の写真が同じ場所で撮影されたものであることを児童に伝えた。（手だて⑤）すると、児童は道路をつくるために海が埋め立てられたことで海苔の養殖（水産業）が衰退したことに気付くことができた。



著作権保護のため加工済み

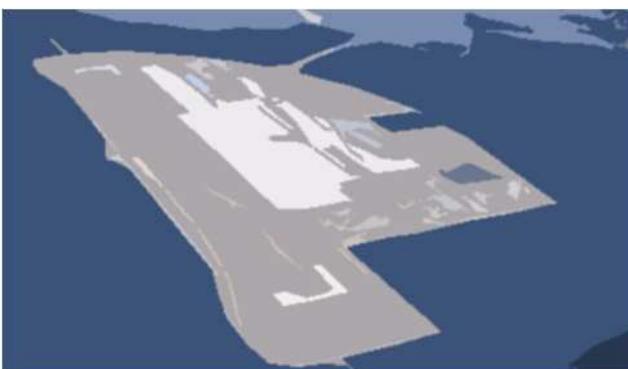
4) 「1980年代の西知多産業道路」



著作権保護のため加工済み

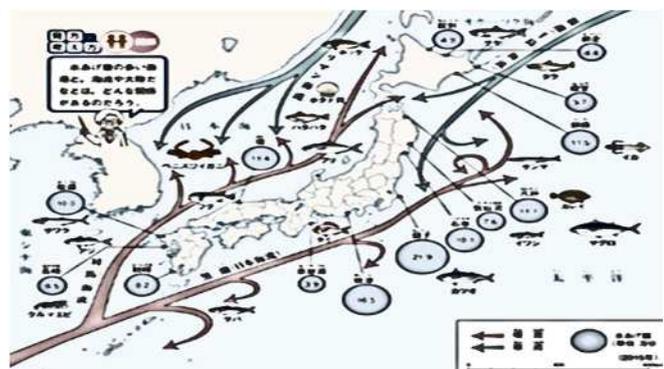
5) 「1950年代の知多市の海岸」

続く第7時では「中部国際空港」<sup>6)</sup>の写真を提示し、その特徴について考えさせた。B児の「直線部分や丸い部分があって自然っぽくない」というつぶやきに対して、教師は学級全体に「なぜ、空港はこのような形をしているのだろう」と投げかけた（手だて⑥）。児童は話し合いの中で、「飛行機が飛ぶときに必要な滑走路を長くするためだよ」や「こ



著作権保護のため加工済み

6) 「中部国際空港」



著作権保護のため加工済み

7) 「潮の流れを示した地図」

の島は、前からあった島を元にしてつくられたから変な形だよ」という意見が飛び交った。そこで教師が、以前水産業の学習で取り扱った「潮の流れを表した地図」<sup>7)</sup>を提示した。A児が「潮の流れ」という言葉をつぶやくと、B児が「そうか、空港の不思議な形は、潮の流れを邪魔しないようにして、海の生き物達を守るための形だ」と推測した。

C児の振り返りには、「魚のことを気にして、埋め立て地の形を丸くするのは、水産業にも優しいので支え合っていると思いました」と記述されていて、空港の形に着目させることで、産業同士の関わりに気付き始めたことが分かる。

### (5) 単元の学びの総まとめ

その後の第8時では、内閣府がまとめた Society5.0における社会の予測映像の動画を見て、今後の日本の産業のあり方をイメージし（手だて⑤）、最終の第9～11時で、これまでの学習を踏まえ、自分たちがつくった「理想の街」を再検討した。児童たちはこれまでの学びを活用し、風車や太陽光パネルを描き「エネルギー」を重視した街をつくったり、漁港や牧場近くに加工する工場を配置し、スーパーへ直送できるようにした「食」をテーマにした街をつくったりするなど、各班は「さらなる理想の街づくり」<sup>8)</sup>を行った。



8) 「さらなる理想の街づくりをする様子」

## 6 研究仮説の検証

### (1) 仮説1に対して

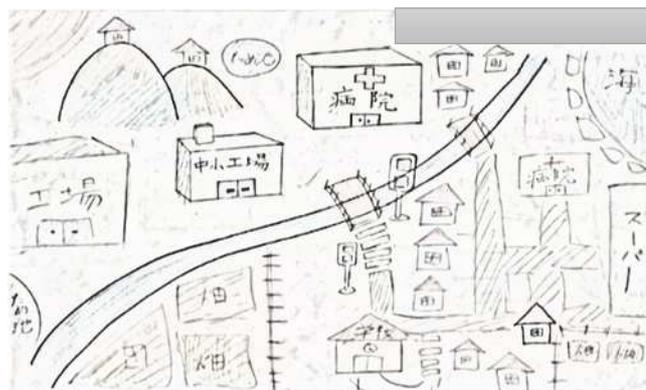
ここでは、社会事象に対して学習意欲が低かったA児、B児を中心に仮説の検証にあたる。A児は自身のつぶやきから、本単元の学習課題が立てられた経験を得た。そして、第4時の振り返りでは「街づくりは楽しかったけど、問題がきりなく出てきて悲しかった。次の街づくりでは、もっと良い街をつくりたい」という記述があり、これは自分たちが作った街に愛着をもち、より良くしたいという学習意欲の高まりに繋がったと考える。さらに、A児は第7時の振り返りで「もし空港の形が四角だったら、海苔が食べられなくなっていたかも…（以下略）」と記述していることから、手だて④の地域の課題を授業の中で取り扱ったことで、日常生活にも関わる課題であると感じることができた。

また、B児は第7時の空港の形に対して、「直線部分や丸い部分があって自然っぽくない」というつぶやきが教師に取り上げられ、学級全体に「なぜ、空港はこのような形をしているのだろう」と投げかけられたことで、自身のつぶやきが学級全体の学びに繋がる経験を得た。そして、B児の振り返りには「知多市にある火力発電所の埋め立て地も同じような工夫があるのか気になった」という記述があり、学習課題を自分の住んでいる町に置き換えて、自分事として向き合う姿が見られた。

### (2) 仮説2に対して

ここでは、追究する力が弱かったB児、C児を中心に仮説の検証にあたる。B児は第5時で手だて⑤である教師の揺さぶりによって、自分たちの街の工場廃水が隣街の川に流れていることに気付いた。振り返りには「工場の汚れが次の街に流れているとは考えていなかった。他の班の街の工夫がすごかったので次回の参考にしたいです」という記述があった。これは自分たちの間違いを受け止め、改善しようと追究する姿であると考えられる。

また、B児は単元終了後に自分の理想の街<sup>9)</sup>を描いた。街のテーマを「災害に強い街」として、医療機関が切迫しないために、病院を二つ設置したり、水不足を補うために、崩壊しても安全な川の下流にため池をつくったりと、自身で調べた災害対策を街に表現した。



9) 「B児が作った理想の街」

また、実践前後に行ったアンケートでは、「話し合うことが好き」「自分の考えをまとめたり、伝えたりすることが好き」という質問項目を実践前後で比較すると、どちらも「嫌い」「少し嫌い」のポイントが減り、「少し好き」「好き」のポイントが増加した。

特にC児は、上記のアンケート結果の理由として「友達の意見を知り、そんな考え方があったかなど、ひらめくことが好きになった」と記述している。このことから、友達の意見を聞くことで、自身の考えを問い直した上で課題解決しようとする追究する力が育まれたと考えられる。

### (3) 抽出児の変容

本単元を貫く学習課題に対する児童全員の考えを実践前後で比較すると、多くの児童が日本のこれからの産業について追究するようになった。さらに実践前に挙げられた「環境問題」や「人手不足の問題」などに留まらず「自然災害」や「エネルギー問題」など多岐に渡る課題にも着目することができた。これは本研究の手だての効果が大きかったと言える。以下は抽出児3人の考えを検証する。<sup>10)</sup>

#### 本単元を貫く学習課題「これからの日本の産業はどのように変わっていくのだろう」

|     | A児   | B児   | C児   |
|-----|--|--|--|
| 実践前 | 農業は人手がなくなり、大変になる。若い人があまりやらなくなる。  | 高齢化がこれからも進んで、農業や水産業が成り立たなくなる。工業は最新の自動車を開発して発展する。   | 産業は衰退する。特に農業、漁業は今と変わらないスピードで衰退していくであろう。  |
| 実践後 | ぼくは、これまでの学習をして、日本の産業は合体して成長すると思いました。僕の家まわりの田んぼは高齢の方がやっていた大変そうだけど、これからの農業や水産業などは人がやらずにロボットが自動でやるなど、農業は違う形で進化すると思います。農業と工業が合体して農工業みたいになると思います。 | 日本の産業はどれも協力して発展すると思います。街づくりでは、日本の課題である災害をテーマに作ったけど、避難ルートや避難場所を作った時、怪我人は、ここにしようとか考えることが好きになりました。津波、地震は怖いので、だから災害で大切な人を亡くさないように災害対策を考えました。 | これからの日本の産業は工業の機械に頼りながら発展していくと考えました。ソサエティ 5.0の動画を見たけど南海トラフなどの災害時では、本当にロボットだけで対応できるのかと疑問に思ったので機械より人々で助け合うことも想定して未来を考えていった方が良かったと思いました。 |

#### 10) 「振り返り記述からみる抽出児の変容」

実践後には、A児は自分の住んでいる町を想定して考えていて、B児は身内の命の安全を考えていた。このことから、学習課題に対してより身近な自分の問題として捉えていることが分かる。また、B児は災害時だけでなく、災害後の対策など、あらゆる方面から思考して、C児は第8時の社会の予測映像に対して疑問をもち、自分なりの答えを出そうとしていた。このことから、決まり切った答えに留まらず子ども自らが「納得解」や「最適解」を求め、追究したと考える。

さらに、3人の共通する点としては、これからの日本の産業について衰退の一途を辿ることだけでなく、どうにか工夫して発展する明るい未来を想定した記述が増えていた。また課題解決の策を考える際には、各産業単体で解決するのではなく、産業同士の関わりの視点をもって考えていた。

## 7 今後の展望

本実践では、主に4つの手だてを講じることで、目指す児童像に近づくことができた。これは、教師が日本の産業の課題と地域の産業の課題を往還させて考えさせ、揺さぶりによって児童に課題を追究させ続けた結果と言える。

しかし、現に子どもたちが社会の形成者としてどうしていくべきかを追究し、多岐に渡る社会課題に対して具体的な解決策を提案するまでには至らず、児童が消化しきれなかったようにも感じた。これらは、教師が学習展開を引導し、学習の仕方等を教師が指定してしまったからだと考える。以下2点は具体的な解決策である。

- ① 社会事象をより自分事とできるように、社会科だけではなく、教科横断的なカリキュラムを編成し、実生活と照らし合わせながら課題を考えていく。
- ② 児童が、いつでも自分の考え方を生かして学習できるように、個別最適な学びを目指す。以上を念頭におき、今後も継続的に研究を重ねていきたい。

## 引用文献一覧

- ・「1980年代の西知多産業道路」  
出典『知多市誌』（1981-1984）知多市誌編さん委員会編 知多市役所
- ・「1950年代の知多市の海岸」  
出典『知多市誌』（1981-1984）知多市誌編さん委員会編 知多市役所
- ・「中部国際空港」 Google アースから引用
- ・「潮の流れを表した地図」  
『小学5年教科書』P.92「おもな漁港の水あげ量と海流の様子」日本文教出版

## 参考文献一覧

- ・文部科学省『小学校学習指導要領解説 社会編』 日本文教出版 2017
- ・倉本哲男『アメリカにおけるカリキュラムマネジメントの研究』 ふくろう出版 2008
- ・池内清『小学校 はじめてのディベート授業』 学事出版 1999